

あるむぜお52

府中市郷土の森だより

al museo NO. 52

2000年6月20日



2 府中宿再訪Part1 府中宿の範囲－江戸時代と明治時代－

3 展示への招待 特別展 遺跡の世界2000－国府出土名品50選&最新発掘速報－

4-5 ノート 国府跡に建てられた社－宮之咩神社をめぐって－

6-7 最近の発掘調査 番外編 埋められた渡来銭 整理作業中間レポート

8 収蔵資料の紹介 『府中案内』の“発見”

9 平成11年度寄贈・寄託・移管資料一覧／平成11年度利用状況／インフォメーション

10 ナチュラルセブン 第1話 姿なき来訪者

府中宿再訪 Part1

府中宿の範囲——江戸時代と明治時代——

馬場治子

古代の武蔵国府と江戸時代の府中宿はこの町の歴史を特徴づける大きな要素です。国府の時代は発掘調査などで明らかにしなければ目に見えにくい状態ですが、府中宿は現代から直接類推できる所がまだまだ残っています。“甲州街道府中宿”郷土かるたでもおなじみの府中宿。町の中心部では建物の姿はここ20年位ですっかり変わってしまいましたが、街並の骨格は府中宿時代のものです。

府中宿の中心が、高札場のある今の旧甲州街道と府中街道の交差点あたりから^{あおくにたま}大国魂神社（六所宮）^{くしよぐう}辺なのはよく知られていますが、宿の範囲がどこからどこまでだったのかは案外気にされていないようです。

幕府の交通政策上の重要な施設として宿場が設定されていた江戸時代には、主要街道は道中奉行の支配の下にあり、写真の『甲州街道分間延絵図』にあるように、宿場の入口には“御料傍示杭”^{ごりょうぼうじくい}が立っていました。これは“ここからは幕府の権限の及ぶ地域だぞ”という意味の標柱です。図の位置は、東は現在の宮町1-36（八幡宿交差点の北西側）、西は宮西町5-11（下河原緑道の南東側）、距離にして約1kmです。その間にいずれも幕領の新宿、本町、番場という3つの行政体があり“府中三町”^{ふちゅうさんちやう}と称し宿場の任務を分担していました。

三町の東隣は六所宮の領地（知行地）^{ちぎょうち}だった八幡宿村です。宿という字はつきますが江戸時代には宿場の範囲ではありません。

明治維新を迎えても初めは府中宿という名前はそのまま三町の構成も変わりませんが、明治4年（1871）、江戸時代に寺社に与えられていた土地を一旦政府に上納する、社領上知が行われた結果、八幡宿が府中宿に変わりました。それ以来地元では“四か町”^{しよかちやう}という語が言われるようになりました。

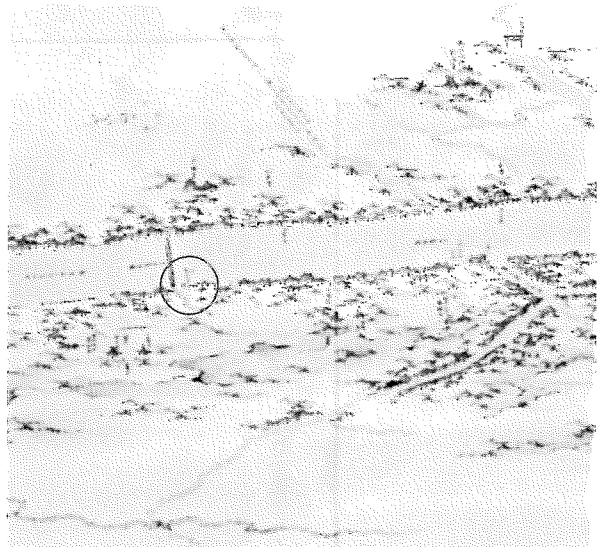
制度としての宿場は明治5年8月に廃止されますが、行政体としての“府中宿”は明治12年に府中駅と改称するまで4町で存続しました。

表紙写真 甲州街道分間延絵図 複製（部分）

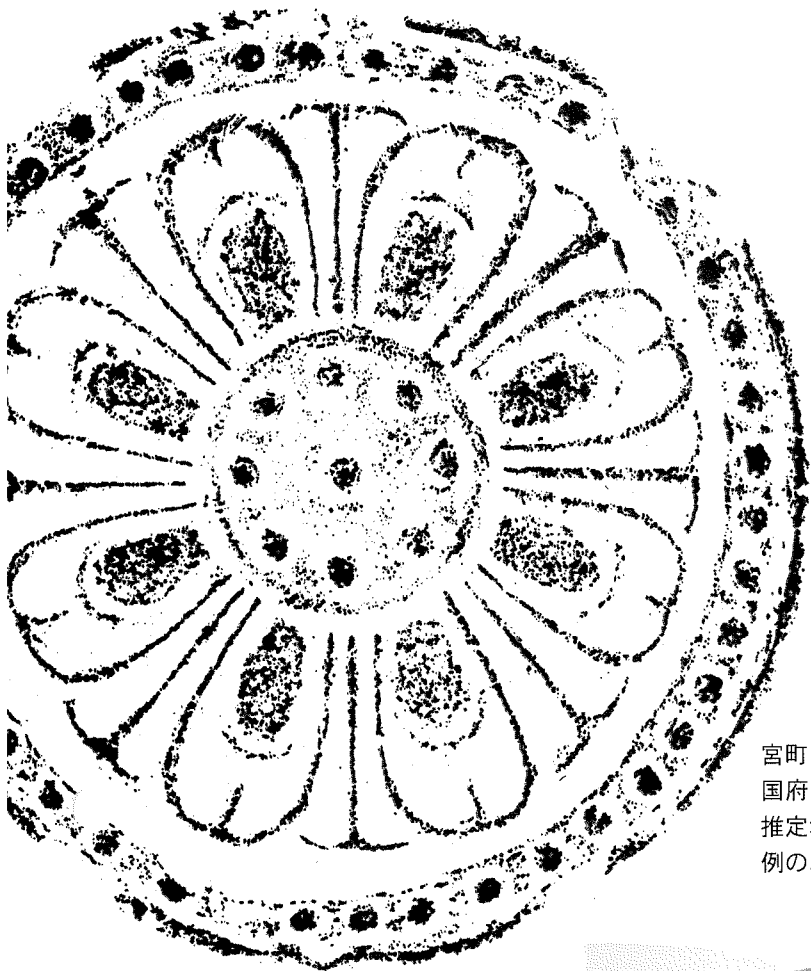
道中奉行所の事業として作られた主要街道の詳細な見取り図の一つ。傍示杭のあるところに“府中宿入口新宿”と記されています。下はその現況です。



この2枚は、西の傍示杭が記されている「甲州街道分間延絵図」の部分とその現況です。「延絵図」ではそばに“鹿島坂土橋”^{かしまざかどしはし}が描かれ、今は鹿島坂の説明板が立っています。



国府出土名品
50 選
&
最新発掘速報



宮町2丁目出土 軒丸瓦 のきまるがわら
国府の中核とも言うべき国庁・国衙 こくちやう こくが
推定地の東隣からの出土。よそに類
例のない優美な瓦だ。



片町1丁目出土 緑釉陶器 りよくゆうとうき
マンション建設に先立つ調査で大量に
出土した緑釉陶器の一つ。花文を陰刻
した当時の高級陶器。

府中といえば「武蔵国府」。そう、府中は古代に武蔵国府の置かれた伝統をもつまちです。住み良い土地は、今も昔も同じ。府中の市街地の大地の下には、そうした古代国府のまちが眠っているのです。

西暦2000年。今年は、武蔵国府の発掘調査が継続的に行われるようになって、25年という節目の年です。この間、市民のみなさまの協力を得て、1,000か所を越す地点を調査してきました。

これまで、こうした発掘調査の成果は、発掘速報展でその都度公にし、常設展示や各種展示会でも積極的に活用してきました。しかし、発掘された遺物の数は膨大で、多岐にわたります。そのため、多種多様の遺物を一堂に展示する機会は、なかなか設けることができませんでした。

そこで今回は、25年間の集大成として、選りすぐったおおよそ50件の遺物を展示する事としました。奈良三彩・緑釉陶器・白磁・墨書土器・瓦・硯・瓦塔・錢貨などなど、国府跡ならではの豊かな出土品に触れ、府中が国府のまちとして賑わいを見せた古代に思いを馳せていただければと思います。

§ § §

あわせて、昨年度の調査概要も速報展示します。

国府跡に建てられた社

宮之咩神社をめぐって



雑踏の中を宮之咩神社に奉幣に向かう神官

(大国魂神社提供)

▼ 暗闇祭と宮之咩神社

A：今年も5月5日の「暗闇祭」を楽しんだよ。毎年少しずつ見ているけれど、なかなか全体像がつかめないね。

B：そうだね。武蔵惣社（「六所宮」とか「六所明神」と呼ばれた今の大国魂神社）の例大祭に相応しく壮大で伝統のある祭だからね。

そういえば今年は、御輿の出御（おいで）まで参道をフラフラしていたら、境内摂社の宮之咩神社で奉幣しているのを見たよ。

A：午後1時すぎ、本殿前の御白州で8基の御輿が並べ替えられている間のことだね。もともとは、御本社の御輿が御旅所へ向かう途中、この神社の前を通る時に神前に幣帛を奉獻していたらしいよ。

B：へー、そうなんだ。

▼ 宮之咩神社の歴史

B：宮之咩神社は境内摂社とはいえ、中世にさかのぼることが確実な社だったね。深大寺の住僧・長弁の『私案抄』という文集の中に登場していたんだよね。

A：そう、それが史料上の初見だ。嘉慶2年（1388）の「武蔵惣社六所宮般若会の願文」に「宮目社」とあるのが（調布市史編纂委員会『私案抄』1985年）、今日の宮之咩神社と考えて間違いないだろうからね。

でもそれだけじゃなく、この社で行われていた7月12・13日の青袖祭とか杉舞祭と呼ばれる神事も興味深いよ。

B：国内の神職が参集して、夜通し神楽を奏したという祭だね。

A：文治2年（1186）源頼朝が武蔵国中の神職に天下太平の祈禱を行うように命じてから定例化したという伝承があってね。その当否はともかく、天文12年（1547）の7月12日に入間・榛沢・秩父など広い範囲の神職が六所宮に参集している記録があるんだ（埼玉県日高市野之宮神社文書）。ここには宮之咩神社の名前は記されていないけれど、その日付からすれば、これが宮之咩神社を舞台として行われる神事に関係することは間違いないだろう。しかも、この神事が中世に遡ることも証明してくれる。

▼ 国府跡とミヤノメ神社

B：境内摂社でありながら、独自の役割を持っていたといえそうだね。

鎮座する場所が、発掘調査によって明らかになった国衙域（古代国府の官庁街）の西辺に当たる点にも注目できるよ。歴史地理学の立場から古代国府の研究を推進してきた木下良さんも注目していたように、上野国や下野国の国府にもよく似た名前の神社があるしね（『国府』教育者歴史新書 1988年）。下野国では、国府の官庁街の中心となる国庁が既に発掘調査で明らかになっていて、そのなかでも真ん中の最も重要な正殿の位置に宮野辺神社という社があるんだよね。

A：そうそう。今は宮野辺の字を充てているけれど、寛喜2年（1230）の小山朝政の所領の議状には「宮目社」とあるから、この社が鎌倉時代に遡るばかりでな

く、ミヤノメと呼ばれていたことも判るんだよ。

B：上野の国の場合は国府は発掘調査が余り進んでいないけれども、国庁・国衙跡の推定地に、宮鍋様という祠があるんだよね。

A：しかもそこは、上野国の惣社神社の旧地ともいわれていて、宮之辺と呼ばれているんだ。武蔵や下野の事例を考慮すれば、宮鍋がミヤノメの転訛なのは明らかだ。

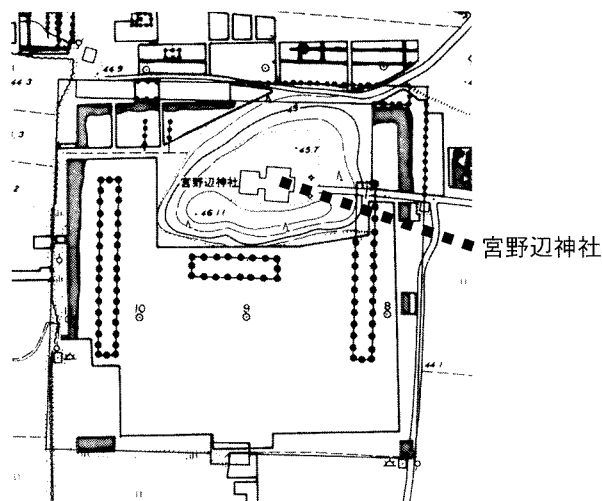
B：この3国府以外では、似た名前の社は見出せないけれど、東国の隣り合った3国で、いずれも国庁や国衙の跡にミヤノメという社が存在する事実は見過ごせないね。

▼ ミヤノメ神社の成立

B：ミヤノメ神社の成立はいつ頃と考えるべきかな。3つの国府にあることからすれば、それぞれが全く違う時代に、違う契機で成立したとは考えにくいよね。下野では1230年に確認できるから、それ以前に成立していたことは間違いなさそうだ。

ちょっと無謀かもしれないけれど、古代の国庁や国衙の一面に祀られていた神社という可能性はないかな。『日本三代実録』(9世紀半ば過ぎの記録書)に、伯耆国の「国庁裏神社」が見えることからすると、古代の国庁や国衙の一面に社が存在していることは明らかだ。昨年、市内寿町の発掘調査で古代の社らしき遺構が発見されて、国府西北の守護神として注目を浴びたように(西野善勝「武蔵国府のお社か」本誌50号)、古代国府に関わる神社は普遍的に存在した可能性が高いと思うんだ。

A：古代国府をめぐる神社の存在はその通りだと思うけれど、「ミヤノメ」神社と9世紀半ば過ぎの記録を結び付けるには年代の隔たりが大きすぎて証拠が不足だよ。やっぱり、古代国府の中核である国庁や国衙の跡



下野国府の国庁 およそ90m四方の塙で囲まれたなかに、大規模な建物跡が発掘されている。壇状に盛り上がった宮野辺神社の位置が、正殿の跡と推測されている。

に、いつの頃からかミヤノメという名前の社が祀られるようになったと考えるべきだね。下野や武蔵の国庁・国衙の廃絶時期は・・・。

B：ともに10世紀代だね。ミヤノメ神社の成立は、その廃絶から13世紀の間ということか。

▼ ミヤノメ神社の性格

A：成立の時期は、神社の性格とも無関係じゃないと思うんだ。下野の場合、鎌倉幕府の宿老で下野国の守護であった小山朝政が嫡孫に譲った所領の一つとして挙げられているんだよ。小川信さんが指摘しているように(「下野の国府と府中について」『栃木史学』2号 1988年)、小山氏にとって「宮目社」の領有は、いにしへの一国の行政の中心を掌握することで、それは自らの地位の正当性と権威を高める効果があったんだろうな。

武蔵でもさっきいっていたように、惣社の境内摂社でありながら、独自の役割を持っていたことをもっと評価するべきじゃないかな。国中の神職が参集して神楽を奏したり、暗闇祭の際に御本社の御輿が幣帛を奉獻するのは、その場所に大きな意味があるからだ。ミヤノメの「ミヤ」は神社ではなく古代国家を背景としたの権力の中核という意味で、「メ」はその中心と考えるべきなんだよ。古代の国庁・国衙の跡が神聖な空間として意識された結果、そこが祀る対象になった、と考えた方が説得力があるんじゃないかな。

B：納得したよ。でも、武蔵・上野・下野の3国府で、そうした機運が持ち上がったのは何故だい。

A：いや、3国府だけの現象とはいいい切れないと思うよ。本来は他の国府でも、ミヤノメ神社やそれに類する神社が存在していたんじゃないかな。早くに廃絶した可能性もあるだろう。

それはともかく、ミヤノメ神社の成立と全国的な惣社の成立時期が、それほど変わらない点も重要だと思うな。

B：惣社の史料上の初見は、11世紀末の『時範記』だったよね。

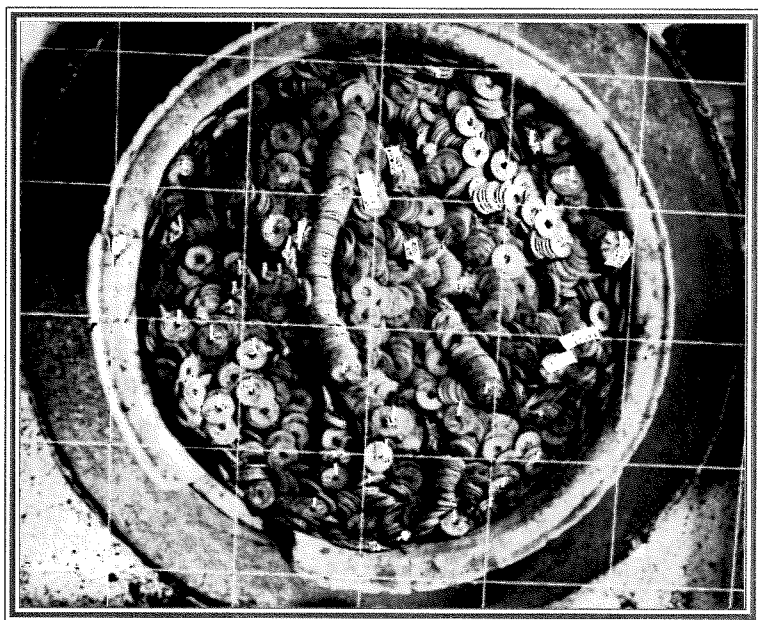
A：そう。平時範の日記で、康和元年(1099)に因幡国に国司として赴任した記事に登場するんだ。

まさにこの頃は、国毎に惣社や一宮を中心とした神社制度が確立していく時期なんだ。神聖視されている国庁や国衙の跡は、惣社が国内の諸神を組織化していく上でも積極的に利用されたんじゃないのかな。想像をたくましくすれば、武蔵の宮之咩神社での神事は、こうした組織化の際に、国衙の跡に国内諸神を結集させた名残かも知れないな。

B：古代の国庁や国衙が中世になっても、精神的支柱として意識されていて、それを惣社が利用したということか。面白いね。

埋められた渡来銭 整理作業中間レポート

整理事務所から 府中市遺跡調査会 穴野佐紀子



本誌44号でも紹介し、一昨年のミニ展でも展示した、あの大量出土銭をみなさんは覚えていらっしゃいますか。そう、1998年の4月に宮西町1丁目のビル建設予定地で見つかり、総数15万7000枚と推定した、室町時代の銅銭です。

あまりに膨大な枚数のため、すべての作業を完了するには、まだしばらく時間がかかりそうですが、ここに途中経過を報告したいと思います。

最上面の銭を取り出したところ
図面をとるため、10cm間隔で糸を張っています。

▼ 甕のなかの様子

緋銭状の塊がところどころに。一番下の方も銭はバラバラの状態。

前回報告したように、銅銭は、2つの常滑焼の大甕とこなめいっぱいに、ぎっしり詰められていました。今回、2つのうち、大きい方の甕に入った銅銭を取り出し、その枚数の確認を行いました。現在は、出土銭の種類の確認作業を行っている最中です。

銅銭は、大甕の口の部分より盛り上がりぎっしり詰まっています。最上面を見る限り、銅銭の多くが1枚1枚バラバラの状態でしたが、なかには一緋ひとまじには満たないものの、緋銭あしづたの状態を留めたものがありました。緋銭とは、銅銭の穴に紐ひもを通して束にしたもので、100枚前後で一緋となります。

このように、緋縄の結び目がいくつか確認できたので、下の方は緋銭の状態に入れられていると予想していました。しかし、銅銭の入り方にはほとんど変化がなく、バラバラの状態のものが多くを占めていました。ただ、ところどころに、縄に通っているものや、縄は抜けているものの緋銭状に錆び付いているものが含まれていました。銅銭と緋縄の他には、なぜか小枝が1本見つかりましたが、その



他には何も見つかりませんでした。

さて、この甕には果たして何枚入っていたのでしょうか。当初の予想だと、重さから換算して約95,000枚だったのですが、実際取り上げて数えてみると、90,690枚でした。銅銭の中には「模鑄銭」といわれる、厚みのない作りの粗雑なものがありますが、今回調査したなかにはあまり含まれておらず、銅銭1枚が厚く、しっかりしたものが多かったので、予想より数が下回ったのでしょうか。

銅銭の種類を確認するためには、緡銭の状態で錆び付いてしまっているものは、それを1枚ずつはがす必要があります。また、銅銭自体も錆び付いているので、錆を落としながら銭名を読まなくてはなりません。9万枚以上の銅銭の銭文を1枚1枚読んでいく作業は、思った以上に大変です。でも、銭種を確認しなければ、いつ埋められたのかといったことも、分からないままになってしまいますので、根気よく続けている所です。

試みに、現在までに読み終わっているもので、統計を取ってみました。まだ1割くらい（といっても約9,000枚！）ですが、今までに確認できたものは59種類で、その多くは中国で作られたものでした。

59種類のうち多かったのは、「元豊通宝」（北宋・1078年）、「皇宋通宝」（北宋・1038年）、「永楽通宝」（明・1408年）、「開元通宝」、「元祐通宝」（北宋・1086年）で、この5種で全体の半数近くに達します。

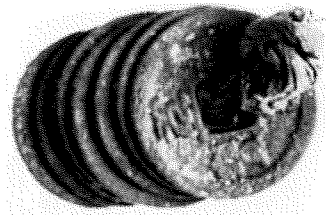
いっぽう、一番古いのは「開元通宝」で、唐の時代の621年に作られたものです。一番新しいのは「朝鮮通宝」で、朝鮮（高麗）で1423年に作られたものでした。

また、日本の古代に作られた銅銭も混じていました。いわゆる「皇朝十二銭」の中の「神功開宝」（奈良時代・765年）と「富寿神宝」（平安時代・818年）です。

さて、この大量の銅銭が埋められた時期については、当初の想定と変わらず、今から500年くらい前といえます。ただこれも、今後の調査で「朝鮮通宝」より新しい時期に作られたものが見つからなければという仮定での話です。

また、比較的新しい時期に作られた「永楽通宝」が、甕の上の方だけではなく、甕の底の方からも見つかったことから、銅銭は甕の中に一気に入れられたと想像できます。

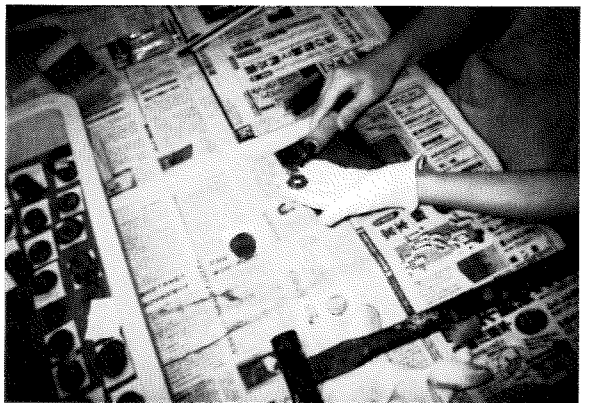
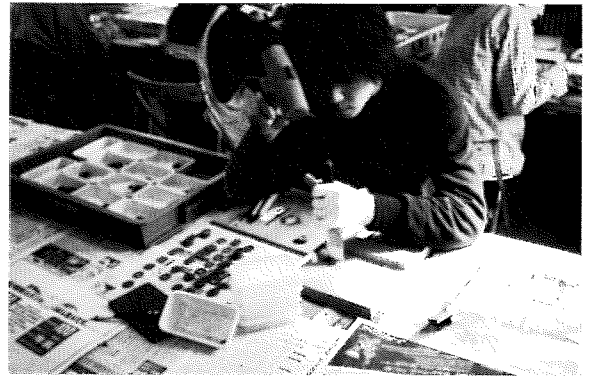
以上、途中経過を報告しました。今後また新しい事実が分かり次第、お知らせしたいと思います。また、残りの甕の方の調査も、今年度に行うことになりましたので、あわせてご期待下さい。



緡繩の結び目（ほぼ実物大）

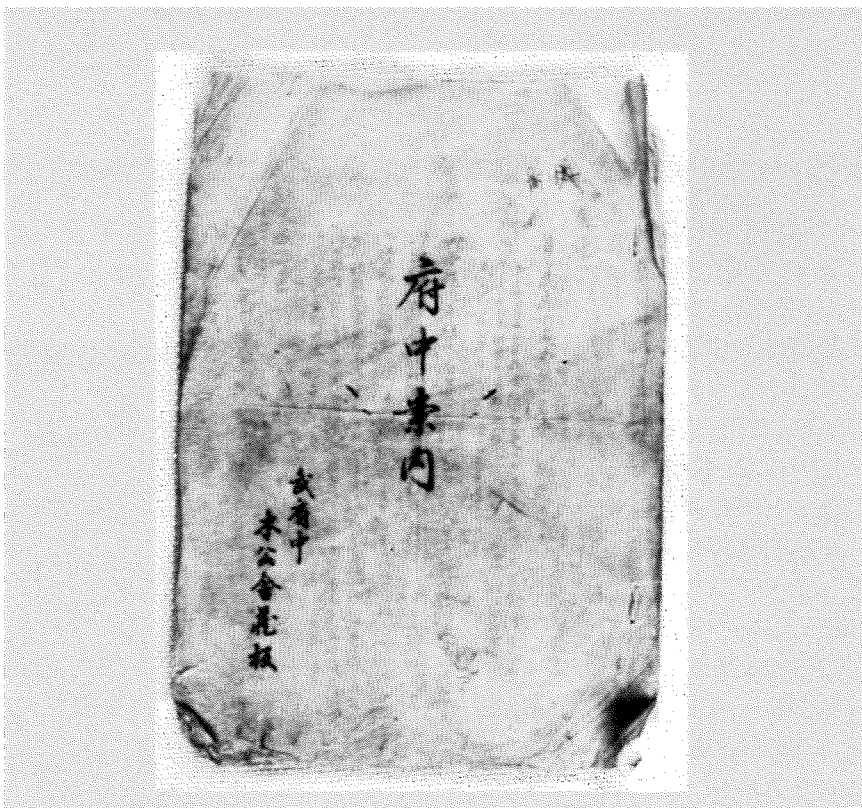
▼ 作業の様子

錆でくっついてる銭を、ヘラと木づちを使って1枚ずつはがし、歯医者さんが使うような道具で錆を落として、銭文を読んでいます。



『府中案内』 の“発見”

馬場 治子



時折新聞で「博物館で新資料発見」などという記事を目にすると「収蔵庫にずっとあったんでしょ、今さら発見なんて」とも思われるでしょうが、博物館も資料の数が増えてくるとさういふ事もあるのです。特に文書群など一括で受入れたものの時は、取急ぎ目録を作らなければいけませんから「これ面白くとか「珍しい資料だ」と思っても一点づつ詳しく検討しないまま時間が過ぎてしまつてくが間々あります。そして時間が経つたり、担当者が変わつたりしているうちにへしまわれ放しくになることも不本意ながら起きてしまつのです。勿論、学芸員はさういつ事の無いよう、常に収蔵品全体を把握し、活用するよう心がけなければいけないのです。今回はその自戒の意も込めて、収蔵資料の中から「発見」された『府中案内』という冊子を「紹介したい」と思います。

これはもつとずいぶん前に、市内のあるお宅から寄託していただいた古文書の中に含まれていました。写真でも分かる様に、決して綺麗とは言えない、ほんの4丁(枚)ばかりの木版摺りです。内容は府中の旧蹟を簡潔書きにしたもので、表現の仕方から江戸時代後半に作られたと推定できます。

一つ一つの情報は余り多くありませんが、載っている項目は、府中 六所宮 東照御宮 神木いてう 国府台 聚遠亭(ここから見える景色として、玉川 向ヶ岡 とうかん松 天守台 松連寺 高幡山金剛寺 牢場跡 分倍河原) 首塚胸塚 三千人塚 御瓜田 御用やぶ 矢崎の里 国分寺 御蔵跡 国造ノ社(坪の宮) 安養寺 妙光院です。ただ終わり方が不自然なのでこの後が失われている可能性があまりあります。

名所や旧蹟を紹介する本を一般に「地誌」といい、江戸時代半ば以降大変多くの種類が出ました。例えば「江戸名所図会」や「新編武蔵国風土記稿」のように江戸

とその近郊を紹介した本には府中のことが載っているものがいくつもあります。しかし『府中案内』にある国府台 聚遠亭 牢場跡 御用やぶ等は他の本には見られない名称です。

ただ、これまで知られている史料のうち、幕末の府中の鳥瞰図『武蔵府中国府台勝概一覽図』という木版刷りの中にはこれらの名称が書かれています。両者を見比べると、まるで図と説明文のように対比でき、まさしく「府中案内」されるようです。

では誰がこれらを発行したのでしょうか？ 『府中案内』の表紙には題名とともに「武府中 木公舎蔵板」とあるので府中の木公舎という版元が刷ったことが分かります。

しかし、木公舎についてはこれまで何も知られていません。のみならず、明治時代以前の府中の印刷業に関する情報も初めてです。江戸時代、出版業は幕府の統制が特に厳しい商売で、府中に営業者がいた記録はありません。この『府中案内』の簡便な仕立から見ても販売を目的としたとは考え難いところがあります。今「コトワシヤ」と読むのでしょうか。

木公は一字に合わせると「松」になります。「舎」は建物を表す字ですが、人を泊める所、やどやの意味もあり「〜のや」等とも読みます。宿屋で「まつのや」があったらびつたりなんですが……。

実は江戸後期、六所明神前に「松木屋屋五左衛門」という宿屋がありました。『甲州道中商人鑑』という本にこの宿屋が出した広告文を見ると、鮎魚や小金井の花、武蔵野の月などがあり、観光客誘致の姿勢が見て取れます。

「木公舎」とこの宿屋とを直接結び付けるには根拠が薄いのですが、江戸時代後半盛んになっていた江戸からの近郊行楽歩きの客を自当てる宿屋がこんなパンフレットを作ったとしても少しも不思議ではありません。

平成 11 年度 寄贈資料一覧

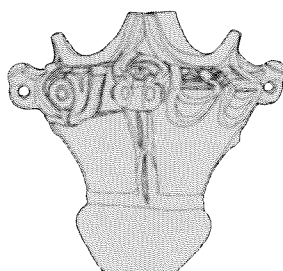
	寄贈者	資料名	分類	数量
1	都築 祐介	小金井府中六所井の頭弁天画帖	歴史・美術	1冊
2	岩井 進一	南極の石 ほか	自然	6点
3	岩井 進一	日本計算機 ほか	民俗	2点
4	山本 豊	燭台	民俗	1点
5	平岡 正之	地図 ほか	歴史	3件
6	平岡 正之	マッチラベル コレクション ほか	民俗	3件
7	野口 忠明	明治天皇肖像画	民俗	1点
8	角張 秋男	丸火鉢	民俗	1点
9	小川 仙蔵	下駄作り道具	民俗	一式
10	皆川 孝枝	へら台	民俗	1点

平成 11 年度 寄託資料一覧

	寄託者	資料名	分類	数量
1	内藤 顕輔	間棹ほか	歴史	10点

平成 11 年度 移管資料一覧

	移管元	資料名	分類	数量
1	教育委員会 埋蔵文化財担当	武蔵台遺跡出土品 都立府中病院内遺跡調査会調査分	考古	一括
2	市教育委員会 埋蔵文化財担当	武蔵台遺跡出土品 東京都埋蔵文化財センター調査分	考古	一括



平成 11 年度利用状況

(H11. 4. 1 ~ H12. 3. 31)

単位：枚

区分		有料		減免 (障害者等)	合計
		一般	団体		
入園者 開園日数 308日	大人	187,302	13,749	16,414	217,465
	子供	54,277	40,139	5,394	99,810
	小計	241,579	53,888	21,808	317,275
博物館入館者 開館日数 308日	大人	11,357	2,867	3,859	18,083
	子供	3,612	10,989	702	15,303
	小計	14,969	13,856	4,561	33,386
プラネタリウム 観覧者 投影日数 295日	大人	22,629	2,250	1,787	26,729
	子供	13,820	13,192	2,018	29,030
	小計	36,512	15,442	3,805	55,759
合計		293,060	83,186	30,174	406,420

INFORMATION

郷土の森新刊紹介

■府中市郷土の森紀要 第13号

¥900

府中市に生息する注目すべきクモについて(Ⅲ)
萱嶋 泉

古代東国の竪穴建物と銭貨
深澤 靖幸

府中六所宮祭礼の近世絵画史料
小野 一之

大國魂神社境内の「彰功碑」について
新宮 譲治

■府中市内家分け古文書目録3

新宿 内藤清兵衛家文書目録

新宿小野宮 内藤治左衛門家文書目録

¥200

■特別展 和同開珎 展示解説書

残部僅少 ¥700

ミュージアムショップに

図書コーナーを増設

本館1階のミュージアムショップを増設しました。本館や市役所で刊行した図書はもちろん、多摩の歴史や自然に関する図書も扱っています。

あるむぜおは定期購読できます

「あるむぜお」は春夏秋冬の年4回発行しています。今まで、その配布は、郷土の森博物館の本館でのみ行ってきましたが、新たに、定期購読をできるようにしました。

連載記事の少なくない「あるむぜお」を、ご家庭でお楽しみください。

希望者は、4回分の送料として、320円分の切手を添えて、本館1階の受付カウンターで申し込んでください。

ナチュラル セブン

第1話 「姿なき来訪者」

中村 武史

府中市自然調査団。郷土の自然に関する調査研究を使命とし、その自然を守るために固い絆で結ばれている。結成以来30年間に渡り、府中の植物・動物・地理における各分野のデータを集積してきた、まさに猛者集団。イズミ団長、ソーマ副団長を頭に総勢20名の団員が、郷土の森自然系分野に関わる調査研究、及び教育普及の実働部隊の役割を担い、博物館とは切っても切れない協力関係を維持している。これからお話しする7つのエピソードは、彼ら自然調査団が活躍する「自然観察会」で得ることの出来たいくつかの自然観や、思うことの一断面である。登場人物の個性と話の内容そのものには、かなりの脚色を加えてあるのでご了承願いたい。出来れば小説感覚で、想像を膨らませながら一読いただけると大変結構なのである。すべては、事実に基づいた創造の世界……

その鳥はいつ頃から園内に侵入してきたのだろうか？声はすれども姿は見えず……最初の遭遇は1999年7月17日、夏休み突入前の「園内野鳥観察会」でのことだった。こんな暑い時期に通常は探鳥会など実施しないが、たまたま4月に予定していた雨天中止分の振替で、野鳥班であるソーマ副団長の都合も加味した上での措置であった。今にして思えば天の啓示(大袈裟?)であったか……常連客の一人が雑木林の樹冠を指差し、「猫の声がする！」と言い出した。いくら世紀末だからと言っても、猫が大空を遊泳する話などバカげている。普通に考えれば鳥の鳴き声を聴き間違えたのだろうか、姿が見えない。ましてや園内で見られる野鳥の中で、猫もどきにニャオニャオとさえずる種類は聞いたこともない。うっそうと茂った高木の葉に隠れた謎のネコドリは、ついに我々の目前に姿を現すことはなかった。「ソーマ先生、一体全体ヤツの正体は何なんですかね？」イライラを抑え切れずに質問すると、逆に落着き払った態度で副団長は答えた。「私に思う所があるんだよ。明朝からもう一度探索を開始するが、意外に奴さん、すぐに現れるような気がするね。」副団長には大体的見当がついているようで、その表情は眼光鋭かった。

翌朝の郷土の森は、前日の観察会参加者と彼らの情報を聞きつけて集まった人達で賑わい、開園と同時に



小学館『日本野鳥大鑑』より

異様な空気が充満していた。それもそのはず、話は妙に膨らみ、あたかも未知の生物が園内を襲撃した旨の内容が伝達されたようで、群衆の表情にはにわかに緊張が走っていたのである。そんな中、探索は始まり、ソーマ副団長を先頭に歩を進めること約20分…いたっ！聞こえる聞こえる、あの猫声。大勢の人間が息を殺して上空を見上げる…静寂の極致…そしてついに木々の間を黄色い影が翔け抜けたのである。一瞬にして静寂は怒濤の嵐に変わった。「ウォーッ！」

「皆さん、お静かに願います！」ソーマ副団長の威厳に満ちた声が、再びあたりを静寂に戻した。「私が推察する所、あれはコウライウグイスかと思われます。もちろんこの辺りでは、非常に珍しい種類です。旅鳥なので、渡

りの途中で立ち寄ったのでしょうが、それにしてもよくぞこの郷土の森に……」

コウライウグイスは、その声の美しさからウグイスと混同されるが、全く別物であり、全身鮮やかな黄色、赤い嘴、目を通る黒い線などの特徴が明確で識別しやすい。日本での観察記録はほとんどなく、中国南部から北部、朝鮮半島から沿海州にかけての地域で繁殖し、インドシナ半島やマレーシア半島などで越冬する。

従って、今回のようにかなり迂回する形で本土に侵入することは極めて稀なケースである。

ひととおりの説明を終えると、ソーマ副団長は感慨深そうな面持ちで空を見上げながら語りかけてきた。「そりゃ地球環境の変化も少なからず影響しているんだろうけど、いいかい、大事なことは、あの鳥が郷土の森を選択したってことだよ。野鳥が来る森ってのはね、高木・低木が密集して、餌となる昆虫が豊富に集まり、餌場としても隠れ場所としても、そして営巣場所としても成り立っている所なんだよ。凄いことじゃないか、郷土の森はそんな森になったことを証明してくれたんだからね、突然の珍客は。」

2ヶ月の間、野鳥愛好家やカメラマン、果ては新聞社までが連日園内を訪れていたが、9月15日をもってコウライウグイスはその姿を消した。越冬地へと向かう時期が来たのだろうか。いや、もしかしたら、あまりの喧騒で森の居心地が悪くなったせいなのかも知れない。

※ あるむせお イタリア語で‘博物館で’‘博物館にて’の意